彼岸の駅

立松和平

tatematsu wahei

彼岸の駅

立松和平
Tatematsu
Wahei

樹武書店

立松和平（たてまつ・わへい）
一九四七年、栃木県宇都宮に生まれる。早稲田大学政経学部卒。八〇年、「遠雷」で第二回野間文芸新人賞を、八六年、若い作家のためのロータス賞を受賞する。著書として「途方にくれて」「今も時だ」「歓喜の市」「性的黙示録」「天地の夢」などがある。

彼岸の駅

一九八七年九月一六日　第一刷発行
一九八七年一二月一〇日　第三刷発行

定価一三〇〇円

著者　立松和平
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒一〇二　電話（〇三）二三〇―二二三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　図書印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

© W. Tatematsu 1987
ISBN4-8288-2237-2 C0093
NDC913 194 256p

彼岸の駅　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

彼岸の駅 7
シミュレーション 49
ゾンビの涙 85
月光クラブ 143
淋しいシンデレラ 171
手もとの虹 201
テーブルの地平線 219

装画　田島昭泉
装丁　菊地信義

彼岸の駅

彼岸の駅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

呆然として机の隅を両手で掴んでいる時、吉沢係長は午後五時の終業のチャイムを聞いた。ぬくまったスチール製机のもったりとした重さが、掌の中にあった。同僚や部下たちが立上がって帰り支度をするのを見ながら、吉沢は相変らず坐ったまま身じろぎもせずにいた。時が、ことり、ことり、と過ぎていく。心臓の鼓動が、時を刻んでいるのだ。こうしている間に時が高速で突っ走っていってしまえばいいのに。自分の手持ちの時間がなくなってしまえばいいのに。何を見ているわけでもなかったが、吉沢は瞳さえも動かさなかった。

五人の係長のうち、残業をするのは二人だけだ。二人が執務机の引出しを出して碁盤を置き碁をうちはじめたのでわかった。残業をしたくても、吉沢の係には就業時間を過ぎてまでやってしまわねばならない仕事はなかった。係員はすでに一人も残っていず、係長だけが残業をしたのでは格好がつかなかった。経費節減のため、可能なかぎり残業はつつしむようにとの通達もでてい

た。残業手当てをあてこんで住宅ローンを組んだので、五年前なら手痛い打撃になるところだったが、支払いはもう終っていた。給料の三分の一近くを十五年間も払いつづけたのだ。

「暁の川を渡るぬしさんの姿のあでやかさ」

「無念きわまるぼくの人生かな」

隣に机をならべている係長たちは小声でひとり言をいいあっては碁盤に碁石を置いていた。勝負の局面にあわせて言葉が口をついてでてくるのだ。机の隅を摑んだまま身動きもしなかったのは三分間か五分間か、吉沢自身にもわからなかった。後の二人の係長の姿はとうにない。吉沢が膝に力をいれ、よしっと呟いて立上がると、隣で碁盤に向きあっていた二人が同時に吉沢を仰ぎ見た。

「お帰りですか」

「帰る家はあるけれど、帰りたい家はなし。ああぼくは三界に家なしだ」

天井の蛍光灯の棒を映して白く光る同僚の眼鏡を見ながら、吉沢はずり落ちていた自分の眼鏡のフレームの縁を摘んで直した。碁石が盤に置かれる響きのよい音があってから、くぐもった声がした。

「日の暮れたところがその日の宿だ」

「生きるとは、その日その日の出来不出来。今日もまた不出来だったが」

「お稼ぎなさい」

吉沢は残業をする二人にいった。一人が顔を上げ、口に盃を運んで煽る仕種をした。吉沢は一度は曖昧に笑い、それから明快に笑って大きく頷いた。机と机の間をゆらりぐらりと大またで歩いていった。廊下にでてから、部屋には黴臭い古い紙のにおいが充満していることがわかった。廊下には饐えた靴のにおいが溜っていたが、空気が流れているので気にはならなかった。廊下の窓をふさいでガラス戸のついた戸棚がならべられ、部屋からあふれだした書類の綴りが戸棚の中にも上にも保管されていた。公文書は五年間はすぐに手の届く場所に置かねばならない。だが担当者も代わり、何処に何があるのか誰にもわからなくなっていた。そのうちに五階建てのこの建物中が湿った古い文書でいっぱいになるだろう。手狭になった庁舎も間もなく高層ビルに建て換えられる予定になっているから、壊す時にいっしょに捨ててしまえばいい。骨のようなコンクリート片や鉄筋と、一時でも重要な意味をおびていた書類とが、まぜあわされてブルドーザーで押されていく光景を、吉沢は思い描いていた。それは自分の人生をきれいに葬り去ることかもしれない。

吉沢は一階に降りた。表玄関が閉められたので閑散としたロビーを突っ切り、通用口から外にでた。埃っぽい風には夏の残りが微かに染みていた。空にも明るみがあった。闇に鎖されようとする直前、空は透明な深い表情をした。吉沢は空を見たままで、白線の引いてあるアスファルトの横断歩道にゆっくりと歩を運んでいった。途中で信号が変わったが、まわりの人のように走る気にはなれなかった。猛然と走りだした車がやってくる直前に、吉沢は向かい側の歩道に着いて

いた。車が疾走する風をすぐ背中に感じた。
ここから駅までは道路の両側にネオンがならんでいた。空の青い色がまじり、ネオンの原色はそれほど鮮明ではなかった。ネオンばかりに視線を向けていると、今度は空が暗く見えた。駅と役所とを結ぶ道を、吉沢は三十年間歩きつづけた。ネオンの森を抜けなければ、役所にも駅にもでられないのだ。この往復は波の行き来にも似た際限のなさではないか。自分は波だ、海の呼吸にすぎない、と吉沢は思う。そういえば最近で海を見たのは何時だろうか。役所の慰安旅行さえ理由をつけて逃がれ、旅行にはもう十年もいってない。家族旅行で、一泊二日の海水浴にでかけたのが最後だ。その頃子供たちは、二人とも小学校の低学年で、親のいうがままだった。女房もあまり贅肉のない締まった身体つきをしていて、まだ充分に若かった。
一歩踏みだすごとに、吉沢は身の内に波の行き来が甦ってくる気がした。自分自身もかつては行き止まりのない若々しい力に満ちあふれていたのだ。海のことを思い出してしまったかぎりは、海に住んでいたものを腹の中におさめねばなるまい。日が暮れたところが家ならば、この街が自分の家なのだ。吉沢は眼をつぶって五歩六歩とあるいてみた。自分の身体は空壜のようなもので、身体を傾けたくらいでは水が揺れる感覚は得られない。吉沢は眼を開き、軽四輪トラックの荷台に手をつき肩で息をした。掌に伝わる冷たい感触が気持よかった。
タクシーが強引にはいってきたので、吉沢は道路の端に寄った。開店したばかりのアイスクリーム屋から道路に列が延びていた。吉沢の息子か娘ほどの年格好の若者ばかりである。隣のコー

ヒー店から白いエプロンを締めた男がでてきて、列の若者たちに入口を塞がないようにと手を振り大声をだしていた。

駅前広場からひとつ手前のいつもの路地にはいった。両側には酒場やレストランが軒をならべていた。この路地がこんなに明るくなったのはここ二、三年のことだ。いつもの居酒屋の前の道路に、バケツからいつものように水を打っていた。吉沢が近づいていくと、素肌に白い上っ張りを着た板前見習が水のにおいの中で勢いよく頭を下げた。

「お待ちしてました」

吉沢は笑顔で片手を上げ、その手で縄暖簾を払って店内にはいった。コンクリートの床にも水が打ってあり、湿った冷気が気持よく頬に触れた。

「お早いお帰りで」

カウンターの向こう側の調理場から威勢よく響いてくる板前の声を聞きながら、吉沢はテーブルやカウンターに裏返しに立ててあった椅子を降ろしていった。大きなテーブルが三台あり、六個ずつ椅子があった。吉沢は五人掛けのカウンターの一番奥の席に腰掛けた。カウンターに肘をついて身体を横にすれば、店全体が眺められた。そこには焦茶色のニスが塗られた丸木の柱が立っていて、居眠りする際もたれるのに便利だった。柱の頭が触れる部分には吉沢のヘアートニックの汚れがついていた。吉沢はこの柱に深く染み込んだ汚れを見るたび、自分では理由がわからないながら、涙ぐましい気持になった。この酒場があるかぎり、たとえ自分が死んだとしても、

髪の毛が一本や二本はこびりついていそうなこの汚れは残るのだ。

板前見習が吉沢の前にビール壜とコップとを置いた。壜を持つと指にビールの冷たさが届いた。コップ一杯のビールを一気に飲み干して喉で清涼の気に触れてから、今度はコップの中で気泡が弾ける音を聞いていた。吉沢は頭を横から柱にもたせかけた。もし自分が生きている間にこの店が取り壊されるようなことになったら、この柱だけはもらいうけよう。家の床柱と取り換えることはできないだろうか。吉沢は二杯目のビールを飲んでから、顔を上げた。

「今日の魚は何がうまい」

「何でも」

と板前は無愛想にいった。豆絞りの手拭いで鉢巻をしめた頭は半分以上禿あがっていた。板前はカツオの鱗を包丁でそぎ落としていた。ざりっ、ざりっ、という音が吉沢の耳に触れた。流れゆく時間はこういう音もたてるかもしれない。

「特に何がうまい」

「係長さん、それはこいつだよ。戻りカツオといってね、一旦ソ連にいってから、帰ってきたんだよ。向こうで餌を鱈腹食ってるからね。脂が乗ってるから」

板前はカツオの頭を落とし、背中に出刃包丁をいれたところだ。包丁が動くたびに血があふれてきた。血は白熱灯の光を受けて輝いた。カツオの身体の中で血は自ら発光しているのかもしれない。黒潮の暗い流れに乗って泳いでいる時、カツオの群青色の身体は鈍く発光しているのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c